

病害虫発生・防除情報メールサービス

大阪府環境農林水産部農政室

目次	ページ
特に発生に注意(1月)【野菜類(施設栽培):コナジラミ類】	1
野菜【たまねぎ、あぶらな科野菜、野菜類】	2~3
その他注意すべき病害虫 【ジャンボタニシ、縞葉枯病(ヒメトビウンカ)、トマトキバガ、クビアカツヤカミキリ】	3~5

特に発生に注意(1月)

野菜類(施設栽培):コナジラミ類



タバココナジラミ成虫



タバココナジラミ幼虫



コナジラミ類成虫*



トマト黄化葉巻病発病株

特徴

- ◆葉の汁を吸ってネバネバした液を排泄し、その上にすす病が発生するため、葉や果実が黒く汚れる。
- ◆トマトやミニトマトでは、タバココナジラミの吸汁による果実の着色不良、TYLCV(トマト黄化葉巻ウイルス)の伝搬等の被害を引き起こす。トマト黄化葉巻病に感染すると、生育の停止・着果不良を起こす。
- ◆きゅうりでは、タバココナジラミがキュウリ退緑黄化病を引き起こすCCYV(ウリ類退緑黄化ウイルス)を伝搬する。

防除のポイント

- ◆苗によるコナジラミ類の持ち込みを防ぐため、育苗中の防除を徹底する。
- ◆施設開口部に目合い0.4mm以下のネットを展張し、コナジラミ類の侵入を阻止する。
- ◆施設周辺及び内部の除草を徹底する。
- ◆ウイルス病に対する治療方法はないので、ウイルス病の感染株は施設外へ持ち出し処分するとともに、ウイルスを媒介するコナジラミ類の防除を徹底する。
- ◆発生を認めたら、ベストガード水溶剤(なす、トマト、ミニトマト、きゅうりなど)、アグリメック(なす、トマト、きゅうりなど)等を散布する。
- ◆薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

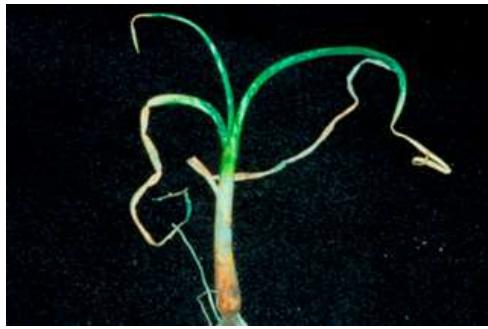
次回の情報は2月上旬にお知らせします。

農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルを確認してください。

野菜

たまねぎ

ベと病



越年り病株*

特徴

- ◆ 育苗時や定植後に、被害残さ等から感染し、越年り病株として1～2月に病徴を現し、周辺への伝染源になる。越年り病株は、葉色は光沢のない淡黄緑色で、生育も劣る。

防除のポイント

- ◆ 越年り病株は取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ ジマンダイセン／ペンコゼブ水和剤、ダコニール1000等を予防的に散布する。

あぶらな科野菜

菌核病



キャベツの被害株

特徴

- ◆ 暖冬・多雨時に発生が多い。
- ◆ ネズミの糞のような黒い菌核が土中に残って伝染源になる。

防除のポイント

- ◆ 菌核が土中に残って伝染源になるので、発病株は、見つけ次第菌核を落とさないようほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ 発生が予想される時期に、ベンレート水和剤(キャベツ、ブロッコリー、はくさいなど)、スクレアフロアブル(キャベツ、ブロッコリー、はくさいなど)等を散布する。
- ◆ 多発ほ場では、菌核病が発生しやすいあぶらな科野菜やレタスなどを連作しない。
- ◆ 水稻との輪作は防除効果がある。

※適用作物は一部を抜粋して記載しています。
使用にあたっては、ラベルの登録内容を確認してください。

野菜類

アブラムシ類



モモアカアブラムシ

特徴

- ◆ 作物を吸汁し、生育を阻害する。また排泄物にカビが発生し、すす病の原因となる。さらに、各種のウイルスを媒介し、作物によっては致命的な被害をもたらす。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、コルト顆粒水和剤(はくさい、レタス、ねぎ、キャベツなど)、トランスフォームフロアブル(はくさい、レタス、ねぎ、キャベツ、ほうれんそらなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

※適用作物は一部を抜粋して記載しています。
使用にあたっては、ラベルの登録内容を確認してください。

シロイチモジヨトウ



幼虫

特徴

- ◆ ねぎでの発生が多いが、しゅんぎく、まめ類、なす科野菜、あぶらな科野菜、花き類等多くの作物を加害する。

防除のポイント

- ◆ ねぎでは葉身内に食入り、薬剤が届きにくくなるので、卵塊の除去及び集団でいる発生初期(若齢幼虫期)に防除を行う。
- ◆ 発生を認めたら、プレオフロアブル(ねぎ、キャベツ、しゅんぎくなど)、グレーシア乳剤(ねぎ、結球あぶらな科葉菜類、しゅんぎくなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

病害虫発生予察注意報第3号「シロイチモジヨトウ」(令和7年9月2日発出)もご参考ください。

https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/84527/2509_r7chuuihou03_shiroichimojiyotou_soshin.pdf

アザミウマ類



ミナミキイロアザミウマ成虫※

特徴

- ◆ 施設栽培では、苗からの持ち込みにより本ぼでの発生が多くなる。
- ◆ きゅうりでは、ミナミキイロアザミウマがキュウリ黄化えそ病を引き起こすMYSV(メロン黄化えそウイルス)を伝搬する。

防除のポイント

- ◆ 雜草はアザミウマ類の生息場所となるため、ほ場内および周辺の除草を徹底する。
- ◆ 発生が見られたら、モベントフロアブル(なす、きゅうりなど)、アファーム乳剤(なす、きゅうりなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

その他 注意すべき病害虫

水稻(越冬対策)

病害虫の越冬量を低下させ、
来春以降の発生抑制につなげましょう。

ジャンボタニシ



成貝

特徴

- ◆ 低温耐性は強くないが、府内では越冬が可能である。
- ◆ 田植直後(約20日間まで)の小さな苗のみを食害する。田植直後以外の時期に被害はないが、個体数を減らすことが重要である。

防除のポイント

- ◆ 冬期に耕うんを行う。越冬個体は地表から深さ6cm以内に分布しており、ロータリーによる耕起(耕うんを浅く、ロータリー回転を速くする)を行い、土中に潜った貝を粉碎したり、地表で寒気にさらし凍死させる。
- ◆ 耕うん機等の土に貝が混じり、他の水田に移動させてしまうことがあるので、移動の際は器具についた土をしつかり落とす。
- ◆ 冬期に水路の泥上げを行い、泥中で越冬している貝を殺貝する。



卵塊

「スクミリングガイ(ジャンボタニシ)生態と防除」(令和7年5月発行)もご参考ください。
<https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/r7sukumiringogai-osaka.pdf>

※原図：(地独)大阪府立環境農林水産総合研究所

*原図：大阪府園芸植物病害虫図鑑(大阪府植物防疫協会)

無断転載を禁ずる。

病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。

<https://www.pref.osaka.lg.jp/o120090/nosei/byogaicyu/index.html>

農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。

農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。

縞葉枯病(ヒメトビウンカ)



特徴

- ◆ 縞葉枯病は、ヒメトビウンカにより媒介されるウイルス病である。
- ◆ 発病した株をヒメトビウンカが吸汁して、保毒する。
- ◆ 本田初期に発生すると、新葉が細くなり巻いて垂れ下がって枯れ、「ゆうれい症状」と呼ばれる状態になる。本田後期の感染では、黄緑色の条斑を生じ、出穂が異常となって出すぐみ症状を起こす。
- ◆ 本府の主力品種ヒノヒカリ、きぬむすめ、キヌヒカリはいずれも本病への抵抗性がないため発病に注意が必要である。
- ◆ 発病を防ぐには媒介するヒメトビウンカを防除する必要がある。
- ◆ ヒメトビウンカは成虫で越冬するため冬から春先の対策も重要である。

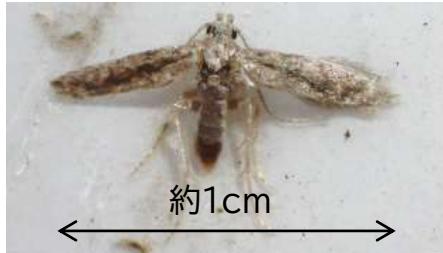
縞葉枯病(ひこばえでの病徴)

防除のポイント

- ◆ ウィルスに感染したひこばえは、本病の伝染源となる恐れがあるので、放置せず刈り株をすきこみ処分する。
- ◆ 冬～春期に畦畔の雑草を刈り取り、ヒメトビウンカの越冬密度を下げる。

野菜:トマト・ミニトマト

トマトキバガ



府内で誘殺された成虫

特徴

- ◆ 寄主植物はトマト・なす・ピーマン・とうがらしなどの主になす科植物である。成虫は夜行性で、日中は葉の間等に隠れていることが多い。
- ◆ 幼虫が茎葉の内部に潜り込んで食害し、孔道が形成される。葉の食害部分は表面のみ残して薄皮状になり、白～褐変する。
- ◆ 果実では、幼虫が侵入して内部組織を食害するため、果実表面に直径数mm程度の穴が空くとともに腐敗するため、品質が低下する。

防除のポイント

- ◆ 発生が疑われる場合は、速やかに病害虫防除グループや最寄りの農の普及課、JAに確認する。
- ◆ 施設栽培では、施設開口部に防虫ネットを設置し、侵入を防止する。
- ◆ 発生を認めたら、アファーム乳剤、グレーシア乳剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- ◆ 被害葉や被害果実はほ場に放置せず、速やかに土中に深く埋却するか、ビニール袋などに入れて一定期間密閉して寄生した成幼虫を全て死滅させてから適切に処分する。

「トマトキバガ 生態と防除」(令和6年3月発行)もご参照ください。

<https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/tomatokibaga.osaka.pdf>

果樹：バラ科果樹(もも、すもも、うめ等のサクラ属)

クビアカツヤカミキリ



フ拉斯

防除のポイント

- ◆被害が大きい樹は伐採し、破碎(チップの厚さは10mm以下を目安)や焼却することが望ましい。
- ◆伐採した枝や幹はほ場に放置せず処分する。すぐに処分できない場合は、ネットやビニールシート等で2重に覆う。
- ◆幼虫は根部も加害するため、なるべく抜根する。抜根できない場合は、伐採後の切り株をネットやビニールシート等で2重に覆い、内部の幼虫の羽化後の分散を防ぐ。
- ◆本種は特定外来生物に指定されており、移動が制限されているので伐採後の残渣処理についても注意する。



幼虫

株元に溜まったフ拉斯

成虫

- ◆秋に大量のフ拉斯を出している被害樹からは来年の6~8月に成虫が羽化してくる可能性が高いので、冬~5月までにネットを樹幹に巻き付け、羽化した成虫を閉じ込め、他樹への分散を防ぐ。

伐採後の切株について

なるべく伐根する

伐根できない場合は、
切株をビニールシートや
肥料袋等で覆う

さらにネットで2重に覆い
隙間ができるないようにする
(根部まで全て)



処分に伴う運搬について

- ◆本種は特定外来生物に指定されており、伐採樹であっても、内部に幼虫が潜んでいる場合は運搬が制限される。このため、処分のための運搬であっても市町村の指示に従うこと。
- ◆市町村焼却施設(もしくは市町村の清掃工場)で焼却可能な場合は、ネットで被覆する等の分散防止措置を実施の上、現地より運搬して焼却する。

野焼きについて

- ◆廃棄物の処理と清掃に関する法律第16条の2により、野焼きは原則として禁止されている。
- ◆一方で施行令第14条第4項において、「農業を営むためにやむを得ないものとして行われる廃棄物の焼却」については例外とされている。
- ◆例外に該当するかどうかは市町村によって異なるため必ず確認し、なるべく焼却施設にて焼却する。

「クビアカツヤカミキリの生態と防除対策(R7.3改訂版)」もご参考ください。
<https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/kubiaka.osaka.pdf>